

書 評

宮本又次著

『株仲間の研究』

増田四郎

一

各々その民族・地方・時代・業務等に應じて極めて多様な性格を示現しながら、しかもなほ、全體として欧州中世商工業社會の顯著な一特質を形成し、その時代精神に少なからざる影響を齎したと観るべき團體活動の中核は、通常ギルド乃至はツンフトの名のもとに呼ばれる制度であつた。過去數十年、欧州學界がこの問題の解明をめぐる、如何に活潑な論争の華を咲かせ、また咲かせつゝあるかについては今更多言を要しないであらう。繚つて吾々自身の國に、かうした欧州の制度にも對應すべき固有の事例を求めるとならば、東西兩洋文化の根柢に横はる團體構成の本質的差違に關する検討に姑く措き、一應誰しも

が中世に見る『座』と徳川時代の『株仲間』の制度に想到すべきことに何等異論はあるまい。されば座乃至株仲間の徹底的な個別研究と総合的な本質把握は、實に日本商工業史の中心課題たるのみならず、弘く本邦文化史上の重要な一項を成すべき筈である。

明治以降、新しき社會經濟史的研究の勃興と地方史編纂の隆盛は、吾々の領域にも夥しき個別研究の貴重な成果と史料を齎した。故にこれらを統合し體系づけて、座或ひは株仲間の綜合的研究を大成することは、恐らく學界の等しく冀求するところであつたが、主としてはその方法上の困難の故に、またその餘りにも多種多様な故に、ついで見るべきすぐれたる論著といへば、概ね特殊研究に限るてふ状態を脱し得なかつたわけである。

かゝる時に當り、吾が學界は最近京都帝大の宮本氏による勞作『株仲間の研究』を興へられた。その内容が史料の關係より大阪中心の研究であり、また主として商人仲間を取扱つたものではあるが、兎に角も上述せる如き綜合的研究を企圖せられた

ものなる點に關し、吾々は著者の眞摯な意圖に萬腔の敬意を表すべきであると同時に、吾が社會經濟史學界が他の研究分野に於ても、これと類似の諸課題を負はされてゐる現下の實情に鑑み、特に方法上の深き興味を覺えざるを得ない。

二

前述せる意味に於て、吾々が特にその総合と把握の方法に多大の期待を抱く本書は、菊版四三四頁、緒論について株仲間の

成立・組織・機能・衰頹・解放が各章別に考察せられ、明治以降に見る同業組合の發展を扱へる第七章及び結論を加へて、全編八章に分けられてゐる。蓋しその意圖は勿論、規模及び量より見るも、この方面に於ける総合的なしかも問題史的な研究としては、まづ類例稀なる大作といふべきであらう。併しその論述の重點は、特に株仲間の組織及び機能の解明たる第三・第四の兩章（三六一―二六一頁）並びに天保改革の經緯を中心とする第五章（二六二―三七一頁）に置かれたものゝ如く、成立と變質の複雑な史的推移を示す記述の部門が比較的簡潔にまとめられてゐる。このことは一面本書讀後に於ける株仲間自體に對する印象からいつて、效果的な方法であるかも知れぬが、それと同時に吾々は、成立・没落の兩過程の分析より問題を把握し乃

至は多様性を見出すといふよりも、寧ろ株仲間最盛時のさなかに乗出し、際限もなき多數史料群の間から、この制度そのものゝいはゞ社會學的構造と經濟史的意義とを抽出せんと企てられた著者の態度を窺ふことができる。それ故行論の印象からいつて、多數史料、わけても大阪關係の第一史料が、本文・附註に亘り縦横に引用されながら、しかも論旨のアクセントが多分に抽象的な結論に方向づけられてあるといふ感じの深いのは止むを得ぬところであらう。

まづ第一章『緒論』（二―二〇頁）に於て、株仲間直接する先行形態ともいふべき中世の座を概説し、その本質を規定して株仲間との差違を暗示すると共に、中世末期以降商業交易圏の擴大・「集權的封建社會」の出現等に伴ふ所謂樂市・樂座運動の意義を鮮明し、かくて勃興せんとする商業社會が、徳川期に入つて鎖國令と社會の固定化に遭ひ、こゝに保守と傳統を重んずる新しき株仲間制度の採用に移行せざるを得なかつた所以の大様を略述する。

大勢かくの如しとするならば、慶長以降元祿の盛時を経て、株仲間關係史料が比較的まとまつて殘存する享保に至るまでの一世紀余、換言せば事實上の株仲間成立期の考察は、吾々の最も興味を惹くところであるが、本書第二章『株仲間の成立』

(二一—三五頁)の記述は、余りに簡潔であつていさゝか物足らぬ感を禁じ得ない。従つて本章の『要約』として列擧された株仲間成立に關する十個の「直接因」や、その成立の四段階に就ての主張の如きも、全體の見透しとしては肯かれるが、この敘述のみから得られた要約としては、或ひは多きに失するのではあるまいか。尤もこのことは著者の責といふよりも、寧ろ史料、殊に商業關係史料の絶對的貧困に由來するものであらう。従つて逆にそれだけ、吾々は徳川前期に關する堅實な研究・傍證的史料の集成等の必要を痛感する次第である。

本書の核心たる第三・第四の兩章は、さきにも一言した如く、諸般の史料に基く適切な實例を引用整理して得たる株仲間そのものゝ制度史的乃至は經濟史的構造の分析統合である。即ち専ら制度史的觀點よりする第三章は、株仲間の構成・機關・精神・負擔の四節に分けて詳論せられ、これにつゞく第四章では、かうした株仲間制度に内在する統制的・文化的・經濟的三大機能がとりあげられ、就中重要なる經濟的機能として、獨占・權益擁護・調整・信用保持の四作用が検討される。こゝに至つて吾々は、いはゞ最盛期に於けるティピカルな株仲間の組織・團體精神・機能等を極めて體系的に印象づけられるわけであるが、この制度もやがて間もなく動搖と破綻の運命に逢着する

こととなる。

つまり對社會關係に於てあたかも「肯定的な存在」であつた株仲間は、既に自らの成熟過程の裡に多くの矛盾と弊害の萌芽を育成しつゝあつた。それが徳川中期以降に見る社會意識の變化・經濟社會の進展・官邊財政政策の變動等々めまぐるしき世相の變轉を反映して、その後期には對社會的に「否定的」存在の色彩を濃厚に表明するに至つた。かゝる衰頹過程の具體的表現こそ、かの天保改革に端を發する仲間禁止・再興・復活のあつたゞしき政策的動搖の時代であり、第五章の敘述がそれに當る。天保改革前の株仲間に関する考察と照應して、この制度を中心として見た改革の評價・嘉永度問屋組合の再興事情・安政度株仲間の復活經過等が巧みに検討把握されてゐる第五章の敘述は、本書全體から見て、實證的史的推移の本流を形成するものであり、そこから吾々は政治・社會・商業(株仲間)三者の興味ある葛藤・偶發・必然の複雑な歴史事象を汲みとることができよう。

著者は更に第六章『株仲間の解放』(三七二—四〇二頁)に於て、明治維新の對株仲間政策・市中商社の發生を跡づけると共に、明治二年乃至六年にかけて行はれた各地同業仲間の解放・營業自由原則の確立を概觀し、また第七章『同業組合の發展』

(四〇三—四一三頁)なる一章を設けて、明治初期より今日に至るまでの各種同業組合發展の梗概を述べ、株仲間と新しき組合との異同・關聯を示唆してゐる。最後に第八章『結論』(四一四—四三四頁)は、特に座と同業組合乃至は會社とふ前後二形態への對比を中心として、株仲間制度の特質を總決算せるものであり、同時に著者の近世社會觀ともいふべき主張を窺ひ得て、興味深きものがあらう。

三

以上極めて粗略ながら、吾々は本書が如何なる構造を持つかの概要を紹介した。その取扱はれた史料範圍の廣大・引用の正確・斷定に對する慎重な配慮等より見て、本書は必ずや今後に於ける株仲間制度研究の最良の指針となるであらうことを信じて疑はない。しかし更に吾々は、著者の眞摯な學問的精進の故に、失禮を敢てしてこゝに讀後の所感を卒直に披瀝し、その把握の方法に關する一二の問題を指摘してみたいと思ふ。

想ふに本書は度々述べた如く、株仲間そのものゝ史的展開の大様をまとめ、制度自體の組織・機能・精神等を分析綜合せるものであり、従つて個々の仲間がその業務種別・地方別に應じて如何なる特質を示し、またそれらが全體として徳川時代經濟

社會に如何なる過程を経て普及し、如何やうに作用したか等の問題は、一應著者直接の關心となつてゐない。團體の類型的な組織と機能を把へ、その中に動く團體精神を検討して制度の歴史性を導きいだすことは、社會學的把握として極めて重要な方法ではあるが、やゝもすれば活きた大いさと内容の緊張を忘失した抽象的結論に陥り易い憾がある。つまりその制度を不可缺のものとして自らのうちに包含したその當時の經濟社會全體のスケールが、内容的に構成的にいきいきと彷彿しない危険が伴ふ。本書は多數史料の正確な引用によつて、充分に個別的なものへの價值評價を行ひ、この點に多大の配慮がされてゐるが、敢て望蜀の感をいへば、もつと構成的に徳川時代經濟社會と仲間活動との有機的關聯を描いてほしいと考へる。

例へばこれを制度中心にはゞ法制史的觀點より把握するとせば、株仲間の存する主たる直接的地緣團體ともいふべき都市と仲間の關係、五人組其他と仲間の關係、幕府乃至藩と仲間の關係、他都市乃至他藩都市または他藩と仲間の關係、仲間相互の關係等々數限りなきテーマが見いだされ、所謂自治的なる力と支配的なる力との限界が、複雑ではあるが活きた社會構造として浮びあがるであらう。

また株仲間の經濟活動を中心に、主として商業・經濟史的觀

點より綜合的にこれを把へんとならば、各種商工業の業務種別に應じ規模に應じて適當な分類を施し、各々の特色を検討するとともに、それらが相互に複雑に交錯作用しつゝ動きゆく經濟機構の全體を描き出すのも一方法であらう。尤もかゝる企ては實際に根本史料群に直面すれば、決して容易の業ではなく、殆んど机上の空論の如くであるが、少くとも綜合的な研究をめざす限り、一つの方法であると考へる。吾々は寧ろかゝる綜合を欲すればこそ、個別的特殊研究の愈々貴重なる所以を痛感するものである。共通の團體精神、共通の團體制度を探らんと欲する場合は兎に角、個々の株仲間を活かしつゝ、しかもその經濟活動の全體をビビッドに把握し、以て徳川時代經濟機構の繪をものせんためには、吾々はまづ何よりも政治・法制・經濟等に關する多面的な配慮と慎重な判断を必要とする。經濟活動の構造を描かんと欲し、十人兩替・札差の如き經濟界一流の仲間と、地方の飛脚・小賣商の如き仲間とを、ひとしく「株仲間」と觀じて結論を抽出することは、あたかも江戸・京・大阪三都の如き大都市と、邊鄙な城下町乃至は宿驛町をひとしく「都市」と唱へてその經濟活動を云々せんとすると同じく、殆んど不可能事といふべきではなからうか。

以上吾々は方法上一二氣づいた點を述べた。併しこれは決して

て本書に對する直接の批判ではない。何となれば本書の目的は先づ株仲間制度發展衰微の過程を大觀し、以てこの制度そのものゝ組織と機構を明かにするにあつたと思はれるから。にも不拘敢て愚見を申述べたわけは、一に株仲間の綜合的研究の「完璧を將來に期」せらるゝ著者に、卒直な所感を披瀝して御教示を乞ひ度いたためであり、二には西洋に行はるゝ進歩せる多様な方法が、吾國社會經濟史學の研究に、どの程度まで技術的に取入れられるかの問題に關し、深き興味を覺え、またひそかに自らの苦惱を感じつつある故にほかならない。尤も方法上の論議はいふべくして行ひ難い。吾々は先づ何よりも、自ら史料に直面し、自ら最善と信ずる方法を示さなければならぬ。この意味に於て著者の努力に敬意を表するが、同時に同じ問題を種々の面から把握すべき多分の餘地の存することを指摘したい。

ともあれ、本書の出現は株仲間或ひは座の綜合的研究の恐らくは最初のすぐれた實例として、多大の刺戟を與へることであらう。吾々は本書を基礎とし出發點として、吾が學界がこの方面に更に新しき成果を簇出するであらうことを希望してやまない。(日本經濟史研究所研究叢書第九冊、有斐閣發行、價四・二〇)

(昭和一三・九・六)